
Fall Rose Chivalric order - **薔薇の散る騎士団** -

クッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fall Rose Chivalric order - 薔薇の散る騎士団 -

【Nコード】

N2624BA

【作者名】

クッキー

【あらすじ】

人の寄り付かないヨーロッパ北東部の秘境。俗世間とは隔絶された、原生林の生い茂る山の奥に、その騎士団は建っている。

そこではたくさんの少年少女達が、日夜勉強や訓練に身を投じていた。

サンレイ・リストーンは、無駄な行為を嫌い、常に有意義な時間を過ごすことを心がける、硬派で優秀な兵士。そんな彼女が、個性的な同級生達とちよつとスリルなお遊びに巻き込まれる。

ヨーロッパ北東部、人の寄り付かない自然が色濃く残る山の奥に、その建物は鎮座していた。

黒と赤に彩られた豪華な宮殿。広大な敷地面積と相まってただならぬ威圧感を放つその外観は、自然に囲まれた山の中で紅一点とばかりに華やかに、しかしどこか不自然に見える。

宮殿を囲む巨大な赤い門を挟んで向こう側に、こちらは黒い門で囲まれた縦長の二つの館がある。一方は黒、もう一方は赤とそれぞれ一色に統一された外壁・屋根。宮殿と負けず劣らず塔のように高くそびえる、直方体のその建物は、これでもかというほど人工的で、宮殿とはまた違う威圧感を放っていた。

原生林が生い茂る周囲とは一線を画した、まるでそこだけ別世界かのような錯覚にとらわれる、宮殿と館。

長い長い夜が明け、太陽の光が全てを照らし出す。

サンレイ・リストンの部屋は、黒寮^{ブラック}と呼ばれる黒い館の1階、103号室にあった。

窓から光が差し込み、彼女は静かに目を覚ますと、枕元にある目覚まし時計の針を確認し、アラームをOFFにした。

午前5時12分。アラームは5時半にセットしてあったが、どうやら少し早めに目が覚めてしまったようだ。

柵のないベッドから出て、簡易式の洗面所に向かう。洗顔、歯磨き、手洗いくらいにしか使い道のない小さな洗面所だ。サンレイ自身、ここでそれ以外の行動を起こすつもりもないので、質素を好む彼女としては別に構うことはないのだろう。顔を洗い、歯を磨く。それを済ませたら、着替える。なんて事のない単純な動作。5分足

らずで終わってしまった。

朝食開始は6時から。それまでは宮殿内に入ることもできない。起きて早々手持ち無沙汰になってしまったサンレイは、どうしたものかと無表情で立ちつくす。

何もしていない時間が、彼女は嫌いだった。無駄な行為も好まない。生産的で有意義な行動を心がけている。それは考えることに對しても同様で、余計なことで頭を使うのは極力避けていた。常に何かをしていないと気が済まない性分、しかもそれが無意味であってはならないという、かなり難しい生き方をしているのがサンレイという少女だった。

することもないので、とりあえず身だしなみを整えることにした。シヨートボブの香色の髪をクシで梳く。細くて真っ直ぐな彼女の髪。オシャレには一切興味が無いので、邪魔にならないという理由だけで選んだこの髪型も、そろそろ3年になる。それ以前の彼女はポニテールにしていたが、結ぶのが面倒になってきたからシヨートにした。こちらの方がお気に入りだ。

その後、襟を直したり糸屑を除去したりなどといった細かい作業を終え、改めて時計を見ると、5時28分。

……あと30分、彼女はこの部屋で有意義な時を過ごさなければならぬのだった。

苦痛の30分を乗り越え、サンレイは部屋を出た。

正面入口の受付係に出席確認をし、野外へと第一歩を踏み出す。

長かった夏が終わり、季節は秋へと移り変わってゆく。門の向こうから見える木々はまだ青々としているが、今に暖色系に染まることだろう。そしてだんだん風が心地よくなってくる。この忌々しい熱風も、来月には爽やかな秋風へと変わっていくのだ。

言うまでもなく、サンレイは夏が嫌いである。

宮殿内に入ると、同じ一番隊に所属する同級生が早速声をかけてきた。

「おはようサンレイ！　すごい、今ちようど6時になったよ、秒針が短針と交わったよ！　時間に正確だね！」

いや別にそこまで緻密に計算して門を潜ったわけではないのだが、目の前で騒ぐ少女はそうは思っていないようだ。

彼女の名は、リズ・アンダーウッド。

2文字でまとめると気弱。

普段は明るく元気な印象を受けるが、実はそれほど活発ではない。つるむ相手からもそれは伺える。身長はサンレイよりも頭一つ分高けれど、だからと言って彼女より頭一つ分優れているわけではないのだ。

散々に言ってしまったが、要は親しみやすい友達である。

「……………」

「なんで黙る？」

「マーチンはまだかなーと思って。マーチンも時間には正確な方だから。5分以上のタイムロス、したことないんだよ」

「リズはしてるのか？」

「サンレイはしてないの？」

「一度も」

「だよー…。やっぱり私とは違うわ」

リズは肩を落とした。5分以上のタイムロスって、ここじゃかなりヤバイはずなのに、彼女はどうやって乗り越えたのだろうか。気になったが、さすがに深く聞くのをやめた。

そこに、サンレイのかなり助かるタイミングでマーチン・デカルトが宮殿へと入ってきた。暗い表情のリズを見て心配そうに声をかける。

「リズ？　…えと、サンレイ、何かあったの？　この子すごい劣等感に見舞われてるんだけど」

「……もしかしたら、私の言葉がリズを傷つけてしまったのかもしれない。すまなかった」

サンレイは自分に原因があると推測し、二人に向かって頭を下げ

た。

「ちつ、違うのサンレイ、サンレイは悪くないよ！ 私が一人で勝手に落ち込んでただけ。顔上げて、ね」

「あ、分かった。アンタ達、てかりズ、遅刻の話してたんでしょ」
サンレイは顔を上げて、マーチンに聞いた。

「遅刻の話？」

「そ。先週だったかしら、この子、髪の毛のセットに時間がかかって、午後の訓練に大遅刻しちゃったのよ。偶然ライアン隊長がいなかったからよかったものの、オデット副隊長にはそりゃーもう怒られてね。訓練終わったあと、私の部屋に泣きついてきて、困ったわ」
「言わないでよマーチン……あの時のことがフラッシュバックしてさらにテンションダウンだよ……」

深みにはまるリズを慰めるマーチン。

彼女は、2文字でまとめると……いや、まとめられなかった。無念。強いて言えば姉御肌という言葉が浮かび上がる。サンレイ達とは違い所属は二番隊だが、リズと共に仲の良い友達である。

「ほら、いい加減元気出さないよりズ。朝食食べる時間なくなるわよ」

「あつ、そうだった!！」

勢いよく立ち上がり、食堂へと駆けていく。どうやら今の一言で完全に立ち直ったらしい。

「廊下は走らないの！ ルカナ執事に叱られるわよ！」

「分かってる〜！」

と言いながらもリズは足を止めない。

ため息をついてマーチンも歩きだした。

「行きましょ、サンレイ。あと40分で閉まっちゃっわ」

- 1 - (後書き)

香色^{ニホ}、って分からなかったら「色見本」でググってみてね。

【資料 Web色見本】っていろいろのを参考にしています。

今回は少しだけファンタジー要素を取り入れることに致しました、
っていつても前作とユーザー名変えてるから誰だか分かんないと思
うけどね。無意味ですなこの文。

まだまだ序盤ですが、興味がございましたら次回も見ていただけ
ると嬉しいです。

あー…字下げ忘れてたーうわーパンナコッターなんてこったー
投稿したばっかなのにー。(´・`・´)。

気をつけよう。うん。

食堂、と言つても、一度に千人以上の人数が一度に集まるような規模だ、生半可な大きさではない。宮殿自体がとつともなく巨大だからこの食堂もあまり大きい気はしないが、もし誰もいない時に入つたらきつと途方にくれるだろう。数時間立ちつくしてしまうかもしれない。それほどに広大なのだ。前方を見ればたくさんの寮生達、天井を見上げれば遙か高みにステンドガラスの天窓、壁は大理石と木がまさかのドッキングを果たした前衛的なデザインと相成っている。形的には横長の直方体だが、高さもずば抜けていて、サンレイが10人いても有り余るくらいの高さなのだ。床面積だつて半端ではない。何かもう、とにかくすごいとしか言いようがない、そんな食堂なのである。

なぜ食堂にこんなにスペースを使っているのだろう…。

サンレイは来る度に思つてしまう疑問を振り払い、マーチンと共に先に到着したリズの姿を探した。

「一人しておくかと危なつかしいでしょ。分かる？ あの何かやらかしそうな感じ」

「大いに共感できる」

長身なりズは探そうと思えばすぐに見つかると思つていたが、甘かった。騎士団の男子は大半がりズより身長が高いし、先生だつて混ざっているのだから身長では見分けがつかない。何よりここにはたくさんの寮生たちが集まっているのだ。見つけたとしても、たどり着くまでに時間がかかる。

案の定、数分探したがリズの姿は見当たらなかつた。

柱時計は6時半を指している。

「そろそろ、私達も食べ始めなくちゃ間に合わないわね。……仕方ない。リズは一旦置いて、私達だけで済ませちゃいませよ」
「そうだな……朝食は7時までだ」

リズ探しを諦め、二人はセルフバイキング式の朝食を摂ることにした。

この場所には世界各国から人々が集まっているので、現地の料理人の手によっていろいろな国の料理を食べることができる。こんな山中からどうやって食材を取り寄せているのかは謎だが、新鮮度はピカイチ。宮殿こそヨーロッパに建っているものの、人気があるのは米国の料理だ。朝からジャンクフードを食べている寮生もいる。サンレイは母国であるスイス料理を皿に盛り、マーチンはイタリア料理のコーナーへ向かっていった。数分後合流し、空いているテーブルに座る。

「もしかしたら、もう食べ終わっちゃったかもしれないわね。大食漢で早食いだから」

「リズくらい食べれば、あれくらいの身長になれるのか……。頑張ってみよう」

「何、身長伸ばしたいの？ やめときなさい、伸びすぎもよくないわよ。せめてリズくらいが女性としてはベストね」

「いや、身長というか、もう少し頑丈になりたいんだ。私は身長も低い方だし体重だつてたかが知れている。実戦では役に立たないかもしれない」

「あら意外。優等生のサンレイがそんなこと言うなんて。私は今のままで十分だと思うけど。バランスもいいし、身長が低いと小回りも利くから、実戦では重宝するんじゃないかしら」

「以前、ルーデイスと対戦した時に、歯が立たなかった。もっと強くならなければ、私なんてすぐに周りに追い抜かれてしまう」

「アンタ、男とも試合してるのね……。あのねえ、男と女じゃ力量差があつて当然でしょうが。勝てる方がビツクリよ」

「ゆくゆくは、ルーデイス並の身長とキャンベル並の力を手に入れたい」

「それ隊長レベルよ……。サンレイは女の子なんだから、もっと可愛気があつてもいいじゃない。そんなんじゃないわよ？」

「私は強くなりたい。そのためなら、女らしさなどいつだって捨てる覚悟はある」

「ていうか、もう半分くらい捨てちゃってるじゃないの。あの頃は可愛かったのになあ。ポニーテール、どうして切っちゃったんだっけ？」

「邪魔だからだ」

「私には真似できない。この髪の毛がなくなったら、私きつと部屋に閉じこもったまま出てこないわよ」

マーチンは綺麗にセットされた長い髪をいじった。栗色の、軽くパーマがかかった髪。鮮やかなツヤを放っている。

マーチンはオシャレに気を遣う。サンレイとほぼ同じ制服を着ているが、スカート丈を短くしたり袖をまくったりと、一見別物だ。化粧もしているし香水もつけている。けれど注意はされない。規則を破らない範囲であれば、服装は割と自由なのだ。

しかしサンレイは必要以上に自分を着飾ることをしないので、逆の意味で目立ってしまったている。

ナポリタンをフォークに絡ませ、マーチンは言った。

「サンレイも、もう少しくらいオシャレしてもいいんじゃない？」

綺麗な顔してるのに、もったいないわよ」

「いや」

サンレイはチーズにパンを絡めながら返す。

「例えば、ここにチーズフォンデュがあるだろう」

「あるわね。一口もらっていい？」

「構わない」

マーチンは皿に盛られたパンをフォークで刺し、チーズの中に沈めた。

「このチーズフォンデュに、チーズがなかったら、マーチンならどうする？」

「チーズがなかったら？ ……そりゃ、調達するでしょうね。スイス料理には詳しくないからどう作るのかはわからないけど」

「私なら、チーズがないまま、これをひとつのパンとして食べる」
サンレイはもう一本新しい串を使い、パンを刺して口に入れた。
「そうすれば、これをチーズと絡めて食べる方法に加え、そのまま何もつけずに食べる方法が自分の中で確立される」

「はあ……」

目が点になるマーチン。

チーズからパンを取り出し、垂れないようにバランスをとりながら口に入れる。

「そして、このパンがチーズを絡めるよりもそのまま食べた方が風味が出て味わい深くなることにも気づくことができる」

その言葉に、マーチンはパンをつまんで一口食べた。

「本当だ。良いパン使ってるのね。確かにそのまま食べた方が美味しいかも」

「チーズと絡めても十分楽しめるけれどね」

サンレイは微笑みながら、先ほどチーズと絡めたパンを取り出した。

「……………」

「何だ？」

黙り込んだマーチンに、サンレイは不思議そうに目を向ける。

「サンレイって……………笑うと少し口調が柔らかくなるのね」

「え？」

思わぬ発言に戸惑い、チーズと絡めたパンを串に刺したまま固まった。

パンからチーズが垂れ、テーブルにこぼれる。

「チーズ垂れてるわよ？」

「あ」

慌ててパンを口に入れ、紙ナプキンでテーブルを拭くサンレイ。それを見てマーチンはおかしそうに笑った。

- 2 - (後書き)

ああ、物語が進まない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2624ba/>

Fall Rose Chivalric order - 薔薇の散る騎士団 -

2012年1月6日20時48分発行